

安定・成熟に程遠い社会

6月4日は、北京が「血の日曜日」と化した1989年の天安門事件20周年である。中華人民共和国という革命国家において人民の軍隊(人民解放軍)が人民(学生や市民)を殺戮するという悲劇を経た後の中国は、予想以上の経済発展を遂げて今日にいたった。しかしその危なっかしい現実、社会の安定と成熟からは程遠い。

中国当局は、天安門事件の当事者ばかりか海外への亡命者に対しても、徹底した締め付けを行っている。この事実が中国当局がいかに事件の正当な根拠に苦慮しているかの裏返しであろう。最近では、天安門事件で軍の銃撃を受けて左胸を失った活動家の齊志勇氏が北京で公安警察に連行された模様である。

当時の学生リーダーの一人の周勇軍氏も、米国からの一時帰国中に拘束されていたことが香港のメディアで伝えられた。これらは報道された若干の事例に過ぎないが、こうした中でも米国や香港などでは、20周年にちなんだ激しい

# 一党独裁存続こそ中国の危機

抗議行動が起こりつつある。

天安門事件をもたらした民主化運動は、その年の4月、86年末からの学生の民主化要求に理解を示したという胡耀邦前総書記が死去したとき、学生や市民の追悼運動というかたちで発生した。やがて5月になると、天安門広場は民主化要求のデモやハンスト学生で埋め尽くされた。

しかも長く対立していた中ソの関係改善のために5月15日に訪中したゴルバチョフ書記長は熱狂的な歓迎が予想されたために天安門広場に足を一歩も踏み入れることができず、同16日夕刻、趙紫陽総書記との会談に臨んだ。

趙紫陽の出方で民主化も

私は当時、この会談の様態をテレビで解説していたのでよく覚えていた。会談の冒頭、趙紫陽氏は「中国ではすべての重要事項の決定は鄧小平同志に委ねられてい

## 正論



中嶋 嶺雄  
学長 養育院 理事 国際

い。そうした現実もあり得たのではないかという歴史的な臨場感を私自身が体験している。

天安門事件の衝撃は、当時ペレストロイカを進めていたソ連のみならず、いぜん社会主義体制下にあった東欧諸国への影響も甚大であった。特に、ホーネッカー独裁体制下、自由を求める難民がオーストリア経由で西ドイツに亡命をはじめていた東ドイツではそうだった。J・S・バッハで知られるライプツィヒの聖トーマス教会や聖ニコラス教会を中心に民主化要求が高まっていただけに、知識人の憂慮は大きかった。

私は1989年秋、ベルリンの壁のすぐ東側にある由緒あるフンボルト大学に招かれ、近くのマルクス・エンゲルス広場が第二の天安門広場になりはしないかと恐れていた東ドイツの知識人に天安門事件の詳しい報告を行った。この時は私のゼミ生の諸君も同行したが、翌日は外国人の特権でベルリンの壁を通過して西ベルリンへ行き、あの壁を東西両側から眺めたのである。その直後の同年11月、歴史的なベルリンの壁の崩壊があ

り、東欧諸国の自由化・民主化が実現する。やがて1991年になると、あの盤石に見えた軍事大国ソ連が崩壊したのであった。体制の崩壊の回避に全力

このように現代史を遠見すれば、天安門事件という中国の悲劇を歴史的な代償にして、ソ連・東欧の社会主義体制が崩壊したといえるのではないか。逆に見れば、天安門事件によって中国も北朝鮮も体制を維持し得たといえよう。その中国については、本来、共産主義青年団系列で天安門事件の再評価を行ってもよいはずの胡錦濤・温家宝両氏の体制下でそれを期待することはできない。

文化大革命への評価が逆転したように、いずれ天安門事件の再評価があり得るとしても、そのときは社会主義中国それ自体が終焉するであろうだけに、当面の中国は体制の崩壊回避に全力で臨んでいる。こうして中国の一党独裁体制はまだ当分は存続すると思われるところに、「中国の危機」の本質があるのだといえよう。

(なかじま みねお)